１．はじめに

本県の高校運動部活動に所属する部員数は，高校生人口の減少に伴い，ここ 20 年間で約 2 割減少し，H24 年度で約 9,000 人，加入率は高校生全体の 52%で，男女別でみると男子 66%，女子 38%である。

運動部員が減少した背景として，少子化による生徒減により，公立高校の学校数やクラス数の再編が実施された影響が考えられ，学校が統合される，部活動が休部・廃部になる，または部員が足りずチームが組めないなどの状況を招いている。また，生徒減は教員の定数にも影響し，教員減による公務の多忙化や，専門的指導者の不足が生じ，運動部活動を取り巻く環境はよいものとは言えない。

そのような中で，いわゆる未普及競技や小規模人口競技（以下，未普及・小規模競技と略す）においては，部員確保や部存続の危機の問題に最もさらされる競技であるが，人口が多く，層の厚い，いわゆるメジャーな競技と比べて，全国大会などで上位成績が残しやすく，本県においては，競技力の指標の一つである国民体育大会の得点源として期待の大きい競技で，本県の競技スポーツを牽引する役割を担ってきた。また，その選手強化対象の中心は，ほとんどが高校生であり，高体連のみならず県体協をはじめ各競技団体，関係機関と密接に連携を図りながら競技力を高めてきた。しかし，近年は，選手確保と強化の歯車がうまくかみ合わず，一部の競技で活躍はみられるものの，決して満足できる結果を残しているわけではない。

そこで，本研究では，本県の未普及・小規模競技の中・高校の運動部活動の活動実態や，意識に関する調査を行うとともに，ジュニア層の育成に取り組むいくつの競技の事例を調査し，選手発掘や育成，競技力向上の現状の課題を明らかにし，未普及・小規模競技の活性化につながる有効な方策を検討することを目的として行った。

２．調査方法

（１）調査競技と対象者

県立および私立の高等学校の 29 校のうち，運動部所属の生徒約 9,000 人の１％（約 100 人）を目安に，未普及競技または小規模競技から 19 競技 699 名を調査対象とした。有効回答数は 629 名（男子 359 名，女子 270 名），回収率は 90.0%であった。調査対象競技と競技別回答数は表１に示した。

表１　調査競技の内訳　　注１　中体連に専門部がある競技

1	ボート	124 名	11	レスリング	23 名
2	アーチェリー[1]	78 名	12	ウエイトリフティング	21 名
3	山岳（登山･クライミング）	61 名	13	自転車競技	20 名
4	ホッケー[1]	49 名	14	カヌー	18 名
5	空　手	44 名	15	相　撲[1]	17 名
6	新体操[1]	35 名	16	なぎなた	12 名
7	体操競技[1]	32 名	17	ボクシング	7 名
8	水　球[1]	31 名	18	ヨット	7 名
9	スキー[1]	24 名	19	飛び込み[1]	2 名
10	フェンシング	24 名	合　計		629 名

（２）調査内容　　中・高校運動部活動の活動実態や意識に関するアンケート

表２　アンケート調査項目

①回答者の属性に関するもの ア　性別　イ　所属校の地区　　ウ　学年　エ　現在の競技種目
②中学時の部活動に関するもの ア　中学時の部活動の種類　　イ　校外スポーツクラブ所属の有無　　ウ　個人的競技か，集団競技か　　エ　入部のきっかけとその理由　　オ　試合出場経験と試合レベル　　カ　中学時の満足度(活動全体・環境・時間・内容・指導法・技術記録の向上・人間関係)
③現在（高校）の部活動に関するもの ア　現在の活動形態　　イ　校外のスポーツクラブ参加の有無　　ウ　競技種目変更の有無　　エ　入部のきっかけとその理由（クラブの実態・環境，自己の適性・欲求）オ　現在の満足度(活動全体・環境・時間・内容・指導法・技術記録の向上・人間関係) カ　活動の目標　　キ　活動の悩み

無記名によるマークシート方式で行った。表２に調査項目を示す。

３　結果および考察

（１）本県の未普及・小規模競技の現状について

今回調査した未普及・小規模競技の部員数は合計699名で，運動部活動部員全体の7.8%にすぎない。男女別でその内訳をみると，男子は男子全体の6.6%，女子は女子全体の 9.9%で女子の方がやや全体に占める割合が大きい。また，ここ約20年ほどでどの程度減少したか，表５の運動部員の部員数の推移をみると，H6 年度と比較して減少率は運動部活動全体で，22.3%であるのに対して，調査対象競技は，37.4%と大きく減少している。各競技別に減少率をみると，最も大きく減少しているのはレスリングであった。また，50%以上，つまり半数以下に減少した競技は６競技あり，うち５競技は未普及・小規模競技だった。また，図１に挙げている減少率 30%以上の競技のほとんどが未普及・小規模の競技であることがわかる。

これらの競技部員が大きく減少した原因として，学校の統廃合により，運動部数が減少したこと，未普及・小規模競技はもともと県内に１あるいは2,3校にしかなく，各校の生徒減により部員確保が困難で減少してしまったことが考えられる。また，未普及・小規模競技は認知度が低く，活動の規模も小さいため，底辺層である小・中学生のジュニア層の競技人口がなかなか増加していないことが原因と考えられる。

（２）競技継続性と運動部選択理由の関連性

未普及・小規模競技運動部に所属する選手が，どのようなきっかけや理由で競技を始めることになったのか，中・高校で同競技を継続する，または高校で新しい競技に変更する，といった競技継続性との関連性があると推測したので,表６に示す３群と，他の項目とクロス集計を行い，その関連性について分析した。

表３　中・高校の運動部活動の加盟率

	全国平均	鳥取県
中学校	66.9%	77.1%
高等学校	36.5%	52.0%

表４　運動部活動所属の男女の内訳

	合　計	調査対象	非対象
全　体	9,005	7.8%	92.2%
男　子	5,796	6.6%	93.4%
女　子	3,209	9.9%	90.1%

表５　運動部活動の部員数の推移

	Ｈ６	Ｈ１５	Ｈ２４	減少数	減少率
生徒数	24,774	19,715	17,617	−7,157	−28.9%
運動部活動全体	11,594	9,614	9,006	−2,588	−22.3%
調査対象部員数	1,116	695	699	−417	−37.4%
非対象部員数	9,567	8,919	8,306	−1,261	−13.2%

図1　競技別部員数の減少率

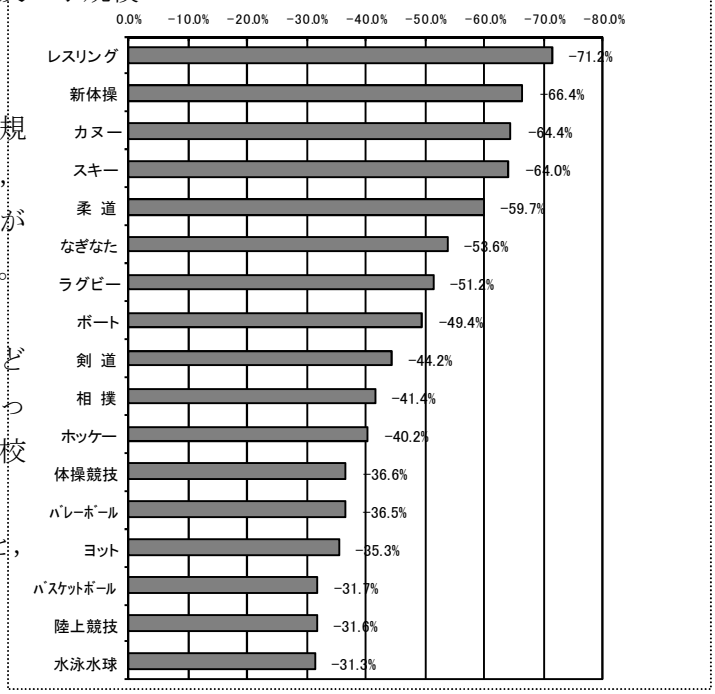


表６　競技経歴に基づく分類

	人数	割合	男子	女子	含まれる主な競技
同競技継続群	109	17.8%	64	45	体操，新体操，水球，相撲，スキー，ホッケー
異競技変更群	446	72.7%	251	195	
ジュニアクラブ経験群	58	9.5%	36	22	空手，水球，体操，スキー，レスリング，新体操，ボート，カヌー，フェンシング,クライミング

【中学時の入部のきっかけと入部の理由】

図内項目前の＊,＊＊は３群間の有意差を表す。＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01

図2 入部のきっかけ(中学時)

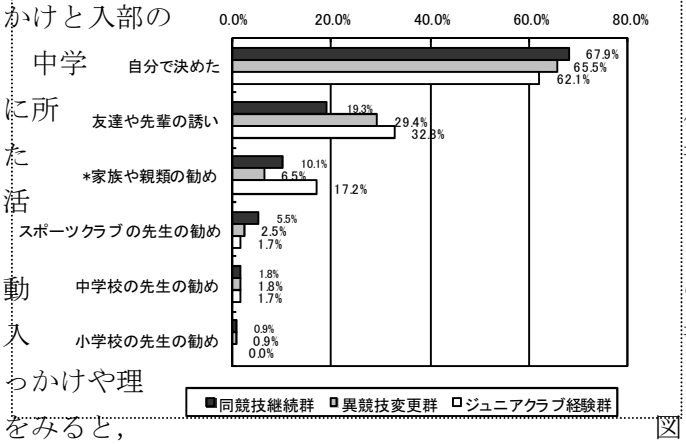
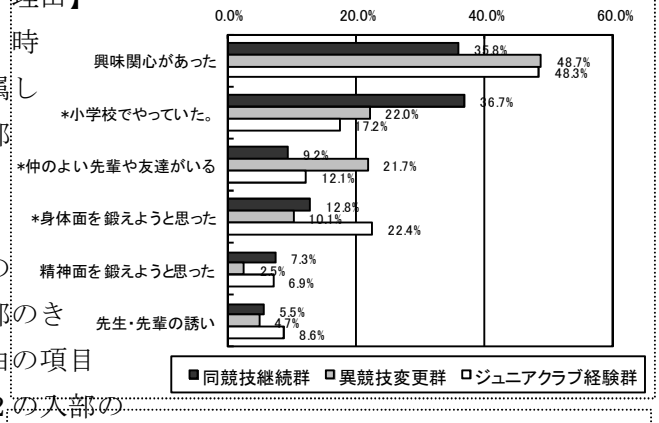
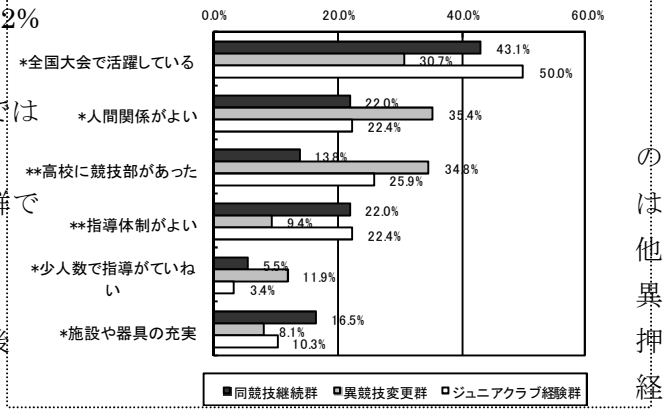


図3 入部の理由(中学時)



中学時の入部のきっかけや理由の項目をみると，図2の入部のきっかけでは，全体では「自分で決めた」65.6%が最も多く，次いで「友達や先輩の誘い」27.9%,「家族や親類の勧め」8.2%と続いた。続いて，図 3 の入部の理由では，「興味関心があった」46.3%が最も多かったが，同競技継続群では「小学校でやっていた」36.7%，異競技変更群では「仲よい先輩や友達がいた」21.7%，ジュニアクラブ経験群では「身体面を鍛えようと思った」22.4%と，それぞれの2群と有意な差が認められた。(p<0.05)したがって，競技変更群に属す者は，周囲の人の誘いが自己決定の後押しになっていることが示唆される。ジュニアクラブ経験群は校外で取り組む競技が，中学校にない場合，周囲の人のアドバイスを聞きながら，身体を鍛えるのに都合のよい競技を選んでいると考えられる。

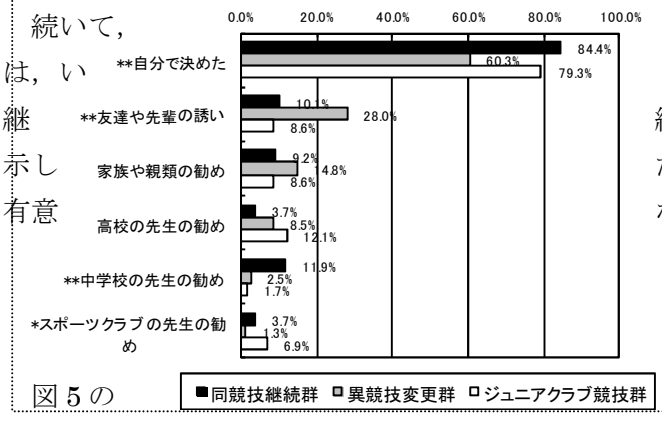
図5 競技を選んだ理由(クラブの実態・環境)



図内項目前の＊,＊＊は３群間の有意差を表す。＊:p<0.05, ＊＊:p<0.01

【高校時の入部のきっかけと選んだ理由】

図4 入部のきっかけ(高校)



続いて，図4の現在高校で所属する部に入部したきっかけでは，いずれのグループも「自分で決めた」が最も多く同競技継続群 84.4%とジュニアクラブ経験群 79.3%と高い割合を示したが，この両者と比較して異競技変更群は 60.3%と低く，有意な差が認められた。(p<0.05)

一方，異競技変更群は「友達や先輩の誘い」28.0%，「家族や親類の勧め」14.8%が他の２群より多く，この2つの選択肢を合わせると 42.8%になった。

図5の競技を選んだ理由(クラブの実態や環境)をみると，全体として「全国大会で活躍している」が最も多かったが，3 群間では同競技継続群 43.1%，ジュニアクラブ経験群 50.0%，異競技変更群 30.7%と有意な差が認められた。(p<0.05)

一方，異競技変更群は「人間関係がよい」が 35.4%（p<0.05)，「高校にその競技部があった」が 34.8%(p<0.05)と，異競技変更群と有意な差が認められた。また，同競技継続群とジュニアクラブ経験群は「指導体制がよい」で，異競技変更群と有意な差が認められた。(p<0.01）これらの結果より，同競技継続群は自分の意志でやることを決め，全国大会などの上位の大会を目指すことを目標にしている方，異競技変更群に属する者は，入学した高校に競技部があり，興味関心を持ち，友達や先輩など周囲の人からの勧誘が，入部への後押しになるものと推察される。

図6 競技を選んだ理由(自己の適性・欲求)

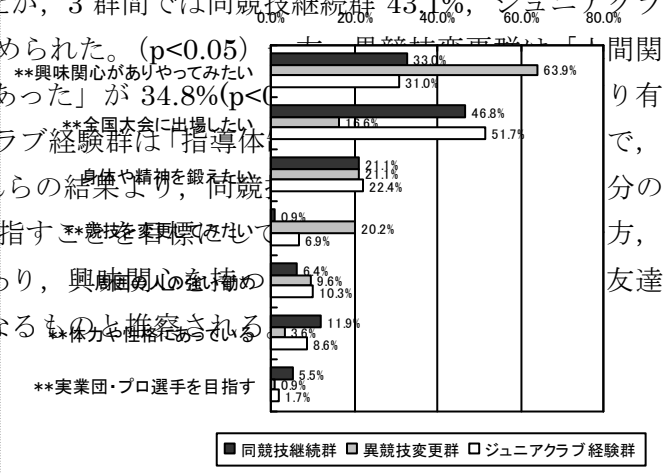


図６の競技を選んだ理由で,自己の適性・欲求に関係する項目を訊くと，全体では「興味関心がありやってみたい」55.3%が最も多いが, 3 群間では異競技変更群が 63.9%で他の 2 群に比べ, 大きく上回った。(p<0.01) 一方，全体で 2 番目に多い「全国大会出場をしてみたい」では，同競技継続群 46.8%とジュニアクラブ経験群 51.7%で，異競技変更群と比べ有意な差が認められた。(p<0.01)

図内項目前の＊,＊＊は 3 群間の有意差を表す。＊:p<0.05，＊＊:p<0.01

（３）競技継続性と運動部活動の満足度との関連性

表７　　中学時の部活動への満足度

	同競技継続群		異競技変更群		ｼﾞｭﾆｱｸﾗﾌﾞ経験群		有意差
	満足度	不満度	満足度	不満度	満足度	不満度	*:p<0.05
1. 活動全体	92.7%	7.3%	81.9%	18.1%	80.7%	19.3%	*
2. 練習環境	83.5%	16.5%	79.6%	20.4%	75.0%	25.0%	
3. 練習内容	88.0%	12.0%	81.9%	18.1%	80.7%	19.3%	
4. 練習時間	91.7%	8.3%	87.7%	12.3%	86.0%	14.0%	
5. 技術/記録の向上	79.6%	20.4%	68.5%	31.5%	73.7%	26.3%	
6. 指導者の教え方	84.4%	15.6%	73.1%	26.9%	63.2%	36.8%	*
7. 人間関係	89.0%	11.0%	80.3%	19.7%	80.7%	19.3%	

中学時の部活動の満足度を訊くと，各項目とも大半は満足（とても満足，まあまあ満足）に回答しているが，異競技変更群とジュニアクラブ経験群では，各項目で不満度（やや不満と大いに不満）の割合が大きくなる傾向を示した。中でも「活動全体」と「指導の方法」の項目では 3 群間で, 有意な差が認められた。(p<0.05) また，不満に回答する者が一番多かった項目は,「技術や記録の向上」であった。以上の結果より，3 群間で満足度・不満度に差異が認められる項目があるが，中学時の部活動の満足度が競技の継続性に大きく影響を与えているわけではないと考えられる。(表 7)

（４）競技継続性と部活動の目標との関連性

競技継続性と部活動の目標との関連性をみると，全体では「全国大会の出場」43.9%が最も多く,「体力や精神力の向上」36.9%が続いた。この 2 項目は競技継続間で有意な差が認められ，同競技継続群とジュニアクラブ経験群は約 6 割が「全国大会の出場」を挙げているが, 異競技変更群では 4 割に満たなかった。(p<0.01) 異競技変更群で最も多かったのは「体力や精神力の向上」で, 他の 2 群よりも有意に上回っていた。(p<0.01)

また，部活動の目標は男女の性差による違いの方がより顕著で，男子では「全国大会の出場」49.3%,「体力や精神力の向上」38.4%,「進学や就職に活かす」29.8%が上位 3 項目に対して，女子は「全国大会の出場」36.3%,「体力や精神力の向上」35.6%,「技術や記録の向上」35.9%の上位 3 項目がほぼ同じ割合を占め,「学校生活の充実」30.7%が男子を有意に大きく上回っていた。(p<0.01) したがって，男女間で活動に対する目的意識が異なることが認められた。(表 8)

表８　　部活動の目標

活動の目標(複数回答可)	全　体	同競技継続群	異競技変更群	ｼﾞｭﾆｱｸﾗﾌﾞ経験群	有意差	男　子	女　子	有意差
1. 全国大会の出場	43.9%	59.6%	38.3%	56.9%	**	49.3%	36.3%	*
2. 体力や精神力の向上	36.9%	18.3%	41.9%	32.8%	**	38.4%	35.6%	
3. 技術や記録の向上	27.7%	25.7%	28.7%	24.1%		22.0%	35.9%	**
4. 進学や就職に活かす	26.9%	31.2%	25.6%	29.3%		29.8%	23.0%	
5. 学校生活の充実	23.3%	19.3%	25.8%	12.1%		17.8%	30.7%	**
6. 責任感や協調性の向上	10.3%	7.3%	11.7%	5.2%		9.2%	11.5%	

7. 国際大会の向上	9.5%	12.8%	7.8%	15.5%		12.8%	5.2%	**
8. 周囲から認めてもらう	5.7%	3.7%	6.3%	5.2%		3.3%	9.3%	**
9. プロ選手になりたい	3.4%	8.3%	2.2%	3.4%	*	4.5%	1.9%	

*:p<0.05,**:p<0.01

（5）アンケート調査のまとめ

①同競技継続群は，小・中学時から競技を始め，中学校のときに全国大会の出場を経験している者が多く，高校でもその競技を継続し，さらに上位大会に出場し入賞したいという，明確な目標を持っており，競技志向の強い活動を求めていることがうかがえる。

②異競技変更群は，競技を始めるきっかけとして，友達や先輩，家族や親類など周囲の人からの勧誘による割合が大きくなる。競技を選ぶ理由についても，入学した高校に中学時にはなかった運動部があり，興味関心を持ったことで，新たな競技に挑戦してみたいという，スポーツ適応欲求の傾向を示している。その背景に，それまでのスポーツ活動への飽和感や自己の競技適性への疑問などで，競技を変更してみたいという気持ちや，スポーツを通して達成感や充実感を味わいたいという気持ちが内在していると推察された。

③ジュニアクラブ経験群は，中学時は他の運動部や文化部で活動し，高校になって，ジュニアクラブで経験していた競技を本格的に活動する者で，同競技継続群と同様，競技志向が強く，上位大会の出場や入賞を目指している。

④未普及・小規模競技の部員確保には，中学から高校への進学時に，新しい環境や人間関係で，興味関心をもったことに積極的に行動しようとするタイミングで，競技の楽しさや魅力が伝わること，友達や先輩，兄弟や親類など周囲の人が勧誘し，決定の後押しすることが必要で，今回の調査により，高校運動部で顧問や部員が，部勧誘に際して，中学生や新入生にアプローチする具体的方法に何らかのヒントを与えるものとなった。

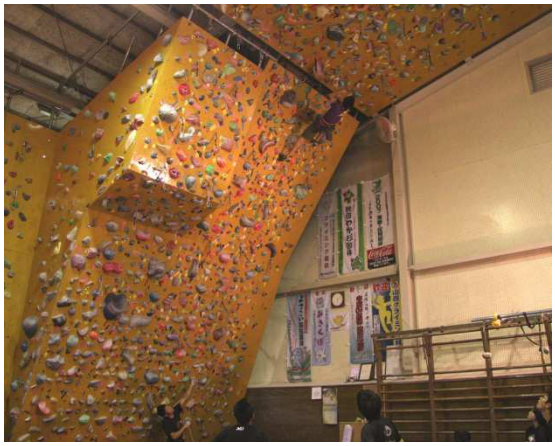
4．ジュニア期の選手育成の現状

アンケート調査の中で，小・中学時にジュニアクラブを経験し，高校でその競技に変更した者が全体の約1割の58人いた。（表7）これらの競技は，選手確保のため，あるいは競技力向上を狙って，ジュニア一貫指導に着手している競技である。そこで今回調査した競技の中で，好循環を生み出しているいくつか競技に着目し，活動内容を調査した結果，その成果や課題について報告する。

（1）ボート競技

ボート競技は県内の東部，西部で盛んで，特に西部の米子市には中海という豊かな自然環境の中で，子どもから大人までボート競技を楽しむ環境が形成されている。社会人チームの漕艇クラブが約20年前よりジュニアローイングクラブを立ち上げ，小・中学生を対象に毎週土，日指導している。指導者にはクラブの方があたる。現在，約10名の受講生がいる。活動成果として，ジュニアクラブ経験者が，今年度インターハイで入賞した。

（2）山岳（クライミング）競技



県内において唯一クライミング競技に取り組んでいる高校が，県中部の高校にある。県体協の支援で国内でも珍しい室内クライミングのトレーニング場が設置された。専門的指導者が県内で一人しかいない中，高校の競技部員の指導のほかに，ジュニア教室を実施し，地域の小・中学生を育成している。今年からジュニア教室で育成した選手が，高校に入部

して競技に取り組んでおり,今後全国大会などでの活躍が期待される。課題は指導者が一人しかいないこと,一人で切り盛りするのも限界がある。

（３）レスリング競技

1999 年（H11 年度）から地域の小・中学生を対象に週 2 回「ちびっ子レスリング」を開催している。受講生は 20 名程度で，指導にはレスリング部 OB があたり，3~5 人体制で指導する。中学時に一度，競技から遠ざかり，他の競技に転向してしまうことが課題であるが，高校で競技に戻る選手が毎年数人ずつおり，全国大会での入賞だけでなく，世界大会への出場を果たす選手を輩出している。普及と強化の両輪がうまく展開されている事例である。

５．まとめ

人口最少県の未普及・小規模競技は，これまで国民体育大会や全国高校総体の開催を契機にして，高校運動部を中心に普及・強化が進められてきた。また，小さな県にとって，全国レベルで活躍できる競技で，その競技力は決して全国に引けを取るものではない。価値観の多様化でスポーツ離れも叫ばれるが，本県の子どもたちはスポーツに対して熱心で，スポーツを通して，自己実現や人間的成長を遂げたいという欲求が強い傾向がある。だからこそ，子どもたちの多様なニーズに応えることや，可能性をひろげていく上で，様々なスポーツに触れる環境や，自分に合うスポーツに出会え満足感を得られる環境を整備することは重要な課題と考える。現状では，指導者側の体制が十分でない競技が多いことが課題であるが，県体協や各競技団体との連携で，ジュニア一貫指導体制，中・高連携が少しずつ進展しており，小さな県だからこそ可能な指導システムができるものと確信している。

最後に，本研究をきっかけにして，未普及・小規模競技の高校運動部や関係競技団体の指導者が問題を共有化し，成功した取り組みの事例や，現状の課題などを情報交換する機会が増え，本県はもちろん全国の競技スポーツ全体がますます発展することを願っている。

〈参考文献および資料〉

１．池上寿伸（2005）　『運動部活動における継続性に関する研究』
２．鳥取県教育委員会および鳥取県高等学校体育連盟　『資料高等学校運動部活動部員調査』
３．鳥取県教育委員会　『鳥取県スポーツ振興計画』